



**Data**

監督・脚本・原作: フロリアン・ゼレール

共同脚本: クリストファー・ハンプトン

出演: アンソニー・ホプキンス / オリヴィア・コールマン / マーク・ゲイティス / イモーゲン・プーツ / ルーファス・シール / ウェル / オリヴィア・ウィリアムズ

## 👁️👁️ みどころ

認知症は恐ろしいが、それをテーマにした舞台劇は面白い。それを83歳のアンソニー・ホプキンスが実証。“第1幕”のストーリーは説得力十分だが、それって全部ウソ・・・？

“癖は強いが、魅力的な人”。そんなファーザーから、「あの男は誰だ?」、「お前は誰だ?」、「家を奪うつもりか?」とまで言われると、娘はどうすればいいの?

「いつまで我々をイラつかせる気です?」。娘のパートナー(?)のその言葉は辛辣だが、そんなドロ沼は如何に収束していくの? 高齢化が進む中、誰もが罹患する可能性のあるそんな病気としっかり向き合いたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■舞台劇は面白い! これぞ適役! 83歳で主演男優賞を! ■

シェークスピアを産んだ国イギリスには、舞台劇が似合う名優が多い。1937年生まれのアンソニー・ホプキンスは、同郷出身の名優、リチャード・バートンに憧れて、内向的な自分の殻を破るように、人前に出る仕事、俳優を目指したようだ。パンフレットの「Introduction」には、「フランス最高位の演劇賞をはじめ数々の榮譽に輝く傑作舞台を『現代において最も心躍る劇作家』(by タイムズ紙)が映画化!」と書かれている。舞台は、2012年にパリで初演されて大成功を収めて以来、ロンドンのウエストエンドやニューヨークのブロードウェイなど世界30か国以上で上演され、ローレンス・オリヴィエ賞、トニー賞など各国の最も権威ある賞を獲得し、日本でも「Le Père 父」のタイトルで橋爪功が主役を務め、大絶賛されたようだ。本作は、そんなフロリアン・ゼレール監督のオリジナル戯曲を、自身が初監督作品として映画化したものだ。

そんな舞台の名作を映画化するについて、フロリアン・ゼレール監督が脚本のクリスト

ファー・ハンプトンとの共同作業の中で大きな変更を加えたのは、舞台も言語も俳優もフランスからイギリスに変えたこと。それは一体なぜ？それについては、パンフレットにある「監督・脚本：フロリアン・ゼレール インタビュー」、「脚本：クリストファー・ハンプトン インタビュー」をじっくり読んでもらいたいが、そのおかげで、これぞ適役！というイギリスの名優、アンソニー・ホプキンスをファーザー役に起用することに成功したわけだ。「鶏が先か、卵が先か」は知らないが、名作舞台を映画化するについて、そんな大幅な変更があったからこそ、第93回アカデミー賞でアンソニー・ホプキンスが主演男優賞を受賞することに！

本作の“ファーザー”ことアンソニーは、アンソニー・ホプキンス（83歳、出演時は81歳）と同名で、生年月日も同じものだから、その設定においてもまさにピッタリ！

### ■□■ファーザー役が名優なら、娘・アン役も名優！■□■

アンソニー・ホプキンスは『羊たちの沈黙』（91年）でアカデミー主演男優賞を受賞しているが、本作で娘のアン役を演じたオリヴィア・コールマンも『女王陛下のお気に入り』（18年）（『シネマ43』25頁）でアカデミー主演女優賞を受賞している。映画は急ぎ足で父親の元へ駆けつけるアンの姿から始まり、「誰の助けも必要ない」と言い張るアンソニーに対して、「自分は新しい恋人ができてパリに移るので、今までどおり毎日面倒は見られない。新しい介護人を」と説得する姿が描かれる。「俺を見捨てるのか！」と憤慨する父親に、「週末には会いに来る、1人にはしない」と約束していたが、さて・・・？

そんな“第1幕”を観ながら私が感心していたのは、アンソニーが住む部屋の立派さ。もちろん一戸建てではないが、彼の部屋の広さは相当なもの。アンソニーはこんな豪華な部屋に1人で住んでいるの？そう思っていたが、“第2幕”では、アンソニーがキッチンで紅茶を淹れていると、リビングに見知らぬ男（マーク・ゲイティス）が座っていたのでビックリ。ところが、その男は「アンの夫のポールだ」と名乗り、「結婚して10年になる」と語った。さらに、ここはアンソニーの家ではなく、自分とアンの家だと主張したから、アレレ。そして、そこに戻ってきたのが彼の妻だというアン（オリヴィア・ウィリアムズ）だが、それが“第1幕”のアンとは別の女だったから、アンソニーはビックリ。こりゃ一体どうなっているの？これだから舞台劇は面白い。しかして、ここまで話がごちゃごちゃになるのは、アンソニーの認知症が相当進んでいるせい・・・？

### ■□■若い介護人の面接は上機嫌で！しかるに、この対応は？■□■

娘・アンの父親評は、「癖は強いが、魅力的な人」というもの。それは彼女の本心だから、父親にも率直にそう語っていたし、今朝、新介護人の面接にやってきた若い女性・ローラ（イモージェン・プーツ）に対しても、同じ言葉を投げかけていた。私は父親の介護も母親の介護もしたことはないが、「癖が強い」とはある意味で「ワガママ」と同義だから、その介護は大変。それは、自分自身の癖の強さやワガママぶりを考えれば、すぐわかる。

他方、男は年を取るにつれて、若い女性が好きになるもの。とりわけ新しく知り合った

若い女性にはえらく饒舌になり、普段することのない“ご機嫌取り”的な言動まで示すことがある。本作に見る、アンソニーによるローラの面接はまさにそれだ。アンソニーは元エンジニアなのに、「ダンサーだった」とふざけてタップのステップまで披露したから、アンはビックリ。しかし、そこまでローラを気に入ってくれたのならひと安心。そう思っていると、アンソニーは笑い転げるローラに対して、一転して辛辣な言葉を投げつけたから、アレレ……。やっぱり、この男は“魅力的な人”よりも、“癖の強い人”の方が勝っているようだ。

そう考えているアンに対して、アンソニーはアンとアンのパートナー(?)が結託して「この家を奪うつもりだ」と攻撃し始めたから、さらにアレレ……。父親の認知症はここまで進んでいるの？娘はどうすれば……？

### ■□■妹のルーシーは？新たな見知らぬ男は？■□■

アンソニーには娘が2人いたから、父親として2人の娘を比較して評価するのは仕方がない。今、長女のアンは父親に介護人をつけながらも、ほぼ毎日父親の様子を見に行っていたから、そのことはアンソニーにとって嬉しいが、同時に煩わしさを伴うことにもなる。また、それは、今は遠くで暮らしている妹のルーシーがいかにいい娘であるかを考えさせるきっかけにもなるらしい。しかし、家の中に飾られているルーシーの写真を見ながら、父親が「お前と比べてルーシーは優しいから」と言われると、アンは……？

本作は舞台劇らしく、舞台は一貫してアンソニーの自宅。広いアパート内のキッチン、リビング、アンソニーの寝室、そして広い廊下が効果的に演出の舞台として使われている。そして、本作は“ファーザー”の認知症がテーマだから、“第1幕”から“第2幕”、“第3幕”へと移っていく中、この家がアンソニーの家でなく、アンとその夫・ポールの家らしいことが暗示される(明示される)ところから、ミステリー色(認知症色?)を強めてくることになる。この家は一体誰のもの？それを考えるのも怖い、リビングのソファに座っているこの男は一体誰？その疑問も怖い。さらに、何よりも怖いのは「ファーザーの目の前の女は長女のアン？それとも……。

『羊たちの沈黙』では、拘束状態に置かれながらも天才的な頭脳の冴えを見せて、ジョディ・フォスター扮する FBI アカデミーの実習生、クラリス・スターリングを翻弄したハンニバル・レクター博士役のアンソニー・ホプキンスだったが、本作に見る“ファーザー”の頭の中の混乱ぶりはひどい。それでも、なお金銭感覚だけはしっかりしているところは面白いが、今リビングにいる、アンがポールと呼ぶ男(ルーファス・シーウェル)は一体誰？そして、この男は「いつまで我々をイラつかせる気です？」と厳しく、かつ挑戦的な言葉を投げつけてきたから、コトは重大だ。アンソニーが「お前たちこそ……」と反論すれば、つかみ合いの喧嘩になりそうだが……。

### ■□■ここは病院？俺は誰？■□■

本作でアンソニー・ホプキンスが『羊たちの沈黙』とは正反対の、認知症のファーザー

役を見事に演じるなら、オリヴィア・コールマンは『女王陛下のお気に入り』で見せた権力者ぶりとは正反対の、ファーザーへの尽くし役を見事に演じている。しかし、本作で観客の私たちがはっきりわかるのは、この父親と娘だけで、それ以外のアンの夫や新しい介護人などは、誰が誰なのかさっぱりわからなくさせられてしまう。再三会話上に登場する、妹のルーシーは今は亡き人だとわかるし、このアパートはきっとアンソニーの家ではなくアン夫妻の家だと思うのだが、クリストファー・ハンプトンの脚本とフロリアン・ゼレル監督の演出によってそれが二転三転させられていくと、アレレ、アレレ、アレレ……。やはり舞台劇は素晴らしい！そして、それを名優が演じるとさらに素晴らしい舞台になり、素晴らしい映画になるものだと実感！

本作はラストが近づく中、ベッドに寝ているアンソニーの部屋がいかにも病院ぼくなくなってくるし、部屋を出て廊下を歩くと、そこは間違いなく病院の廊下になっている。すると今アンソニーは、強度な認知症患者として病院に入れられているの？アンソニーはそれをどこまで自覚しているの？ちなみに、今の私は自己所有の事務所と自己所有のマンションを徒歩1分で毎日往復し、自転車で帝国ホテルのフィットネス（サウナ）に毎日通う生活をしていることをしっかり認識しているが、それもいつか、本作のアンソニーのように混乱してくるかも……？

そんなことを考えると背筋が寒くなってくるが、この評論を書いている最中の6月9日付新聞各紙が一斉に「世界の推定患者数が3千万人にのぼるアルツハイマー型認知症の進行を抑える世界初の治療薬が米国で実用化される」と報じたのは朗報だ。一方ではそんな医療の進歩に注目するとともに、本作ではアンソニー・ホプキンスのアカデミー賞主演男優賞の名演技に注目し、納得！そして拍手！

2021（令和3）年6月9日記